

「読むこと」と関連づけた 「話すこと・聞くこと」

名古屋市長助光中学校教諭 鍵谷 和代

「話すこと・聞くこと」の授業の悩み

新学習指導要領が全面实施され、一年がたちました。「話すこと・聞くこと」には、全年間授業数の1/10から2/10程度確保することあり、教師の意識改革と、教材や授業方法の開発が求められています。

これまで、「話すこと・聞くこと」の授業は、とにかくスピーチやディベート、パネルディスカッションといった学習活動を取り入れればよい。ひと通りの方法を身につけさせればよいという、活動のやり方へのみ終始してしまいがちでした。

そこで、今年度からは、じっくりとその学習で身につける学力を検討し、真に求められている「話すこと・聞くこと」の能力の習得に迫らなければならないと考え

このように、いつもこのテーマでよいと考えず、生徒の実態や、身につけさせたい学力に応じてテーマを設定したいと考えています。時には、生徒とともに、スピーチや話し合い活動の価値あるテーマを考えてみるのも、有効な学習活動になりうるのではないのでしょうか。

「読むこと」から「話すこと・聞くこと」へ

昨年度は、中学二年生を対象に、スピーチとして、ブックトークを実践しました。テーマは、「自分だけの『一冊』を紹介しよう」です。

このころ書店では、話題性のある本を販売するために、本の配架を工夫するだけでなく、実際に店の方が読まれて、その本の注目されることや、魅力などを手書きの短い文章で表現し、カードにして本のそばに掲げています。生徒も、読書好きな者だけではありません。多くの生徒が、友達や家族から「これはおもしろいよ」「読んでみては」と紹介されると、読んでみようかなと心が動くといえます。そこで、読書の裾野を広げるためにも、ブックトークというスピーチに取り組みせました。

しかし、このテーマが、多くの生徒に最初から興味をもって取り組めるという話題ではないのとブックトークが初めてだったので、特に次のような工夫を試みました。

ています。

「話すこと・聞くこと」の授業を実践しようとする、必ず考えなければならないのは、スピーチや話し合い活動のテーマをどう設定するかということです。

まずは、身近な話題。これは、生徒の興味・関心をひき、学習活動が活性化される可能性は高いと言えます。例えば、「中学生にはどんな校則が必要か。」などが挙げられるでしょう。しかし、これはともすると、話の内容が広がらず、自分の都合だけを主張しがちになります。話を聞いたり、話し合ったりすることによって、認識が深まっていかないという危惧があります。

次に、生徒が日ごろ考えたこともない深遠な話題です。この話題でスピーチしたり、話し合ったりすれば、生徒の視野は広がり、さまざまな情報を収集して論を組み立てる学習が成立します。例えば、「日本が国際貢献をしていくためにはどうしたらいいか。」などです。この話題で、スピーチや話し合い活動を行うことによって、その話題に対する関心度が、ぐっと高まることで大きな効果です。しかし、そこに至るまでには、調べたことの発表だけに終わってしまわないようにすることが肝要かと考えます。生徒一人一人に、自分自身の問題として意識をさせ、自分の言葉で語らせる工夫が必要です。

読書が苦手な生徒にも本を選びやすくする。
聞き手にわかりやすい発表のポイントを明らかにする。

「自分だけの『一冊』を紹介しよう」【指導計画(五時間)】

第三時～五時	第二時	家庭学習	第一時	時
相互評価をしながら、ブックトークをする。 (一人一冊、もち時間三分)	ブックトークのための準備と練習をする。	自分のブックトークの本を選ぶために読書をする。	テーマごとに紹介された本の文章の一部分を読み、感想をもつ。 自分のテーマと本を選ぶ。	学習内容 指導の工夫
	発表するときの注意点を互いにアドバイスする。	ブックトークのために、学校図書館や公共の図書館を利用して、本を読ませる。また、読書記録をつけさせる。	「愛」「友」「生きる」「心に残った出会い」という四つのテーマとする。それぞれのテーマについて、三、四冊の本の文章の一部分を読ませる。	
	黒板に本の題名を書いたものを掲示する。 本を展示用の台に載せ、本を見せながら、スピーチをする。シヨウアンドテルの方法をとらせる。			

授業はこんなふう

第一時で、ブックトークをすると告げたとき、生徒の中にはとまどう姿も見られました。「友」というテーマは理解できるが、それが書かれている本を紹介するとなると、どうしていいかわからないと言ってくる生徒、「生きる」というテーマは今まで考えたことがないという生徒などです。

そこで、テーマごとに本の文章の一部分を読んでいきましました。ひと通り読んだ後の感想では次のようなものがあり、読書が苦手な生徒も興味をもったようでした。

「友」

島崎藤村の『身のまわりのこと(抄)』では、「雪が降ったから茶でも飲みにお出下さい」と言えるような、そういう老後の友達を三、四人つくって置きたい」とあった。今の自分では全然考えもしなかった。これから高齢化社会となると思うとそうだなと思うし、今の友だちがそこまでつき合ってくれるかなとも思った。

葉が入っているからとか、いくつかのテーマを含んでいる本だけこのテーマでブックトークしたいなど、和やかな雰囲気準備ができました。

次にテーマごとに、五人までのグループに分かれて練習に入りました。グループの中で一人一人順番に本を見せながらブックトークをしていき、聞き合いました。時間配分のこと、スピーチの仕方、本の見せ方など多方面にわたってアドバイスをし合いました。そして、本の題名などは、ゆっくりはつきり言うこと、エピソードなどを話す前には間をとることを、特に注意するよう確認しました。

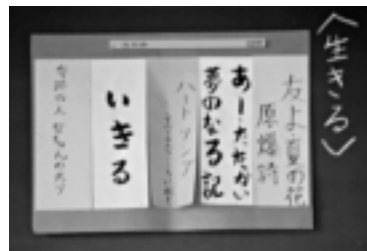
いよいよ第三時から発表です。三時間にわたったブックトークの発表会は、あらずじや概略だけではなく、本の目次を読んだり、表紙や挿絵、写真などを解説したり、読みながら関心をひいたりして、本の見所を紹介していくといったそれぞれの工夫が見られました。

聞く側は、評価をしながら聞くようにしました(資料2)。生徒の様子や聞き取りメモから、どのブックトークでも、興味深げに聞くことができたのが感じられました。最後にブックトークについての感想を尋ねたところ、「楽しかった」「読んでみたい本があった」と口々に答えていました。

「生きる」

井伏鱒二の『山椒魚』の中の「ああ寒いほど独りぼっちだ!」という言葉は、どんな場面であれが言ったのだらう。先生にあらずじやを少し聞いたけれど、読んでみたい。

このように、少しずつ興味をもち始め、家庭学習での読書に取り組みました。十日ばかりたった第二時に、発表の準備と練習をしました。まず、生徒一人一人が本の題名を配置、字の大きさなどに注意して、毛筆で書きました。それを前の黒板に、テーマごとに色分けした色画用紙にはっていき、各自がどのテーマで発表するのかを確認しました(資料1)。題にテーマの言



資料1 本の題名を並べて

おわりに

これからも、各学校において、さまざまな「話すこと・聞くこと」の実践が行われ、テーマも多く紹介されていくことと期待しています。「話すこと・聞くこと」の学習を通して、生徒が自己を開示し、相手を受容し、お互いの考えを高め合い、それが認識を深めていくといった言語能力を身につけていくことを忘れてはいけな

資料2 聞き取りメモ例

ブックトークをしよう				あなたにお勧めのこの一冊			
本名	著者	内容	感想	本名	著者	内容	感想
山椒魚	井伏鱒二	寒い冬、独りぼっちの山椒魚が、仲間を求め、雪を踏み破り、春を待つ。	寒さを感じた。山椒魚の気持ちに共感した。	生きる	井伏鱒二	生きるというテーマについて、自分自身の経験や考えを話した。	生きるというテーマについて、自分自身の経験や考えを話した。
...	...	...	...	...	...	...	...